



ご近所トマソン隊

by うさお



トマソン隊の収録10号に「ご近所の道路の蓋」を発表させてもらいました。あれからほぼ1年経ちました。同じく枯れ葉の舞い散る季節になりまして、少し道路の蓋が溜まりましたし、第2弾としてご報告したいと思います。まっ、いつものことですがトマソン隊の知識は、「トリビアの泉」と同じで、知ってても得にはならないよ。

さてとある日に、自宅の前のマンホールの蓋が車に轢かれる度に、煩いことこの上も無いことから、ライ隊員とその原因追及に向かったのが、前回のご近所の蓋の初っ端でした。番外では鎌倉の下水道の蓋（笹竜胆紋）もご報告しました。



きっかけは～あ～
ライ隊員！



桜と銀杏です！如何にも東京！

今回は少し足を延ばし、東京都の蓋と長野、三島、鶴岡、梅坪の蓋を比較検証して見ましょう。番外として、ミラノ、パリ、ロンドンの蓋もご紹介します。

これでひとつ判ったことは、海外における蓋はあくまで機能を重視したサインであること。しかし、日本における蓋は、城下町を支配するお大名の紋所のようなもので、総漆塗金蒔絵ほどではないにしろ、市や県の紋所をフューチャーしながら、その存在を顕しているデザインだと思えるね。

この辺は Tomy Jr さんの領域ですね。言葉を変えると日本のものは、浮世絵的芸術品のよう思えるよ。ということで、では、まずは東京を見てみましょう。

最初の時は、横浜の蓋でしたので「浜」という字をシンボライズした「菱餅」がデザインの基でしたが、時の流れで今様な「ベイブリッジ」に変わりました。シンボルをより鮮明な横浜のイメージ、港（みなとみらい21）にしたんですね。

さて東京はというと、「桜」と「銀杏」なんですよ。

これはすなわち、「桜」イコール日本と言う図式で、日本の中心は東京だというような、「中華思想」のように思えますね。何てな！

ただ、デザイン的には、面白みに欠けますよね。種類といおうか、バリエーションが少ない。

消防用の蓋もイマイチ派手じゃないし、ここだやって自己出張していないし寂しい限りです。どうも思い入れというものが無いんじゃないかな？トマソン隊の収録2号で



う～ん、東京都です



中央のマーク違い1



中央のマーク違い2



桜と銀杏、デザイン違い



これはなんだろう？



大変擦り切れている。年代ものか？

「水道」をやりましたが、やはり横浜は日本での水道発祥の地であるため、下水道の蓋にも、それなりの思い入れを感じます。

これらの蓋のサンプルは、上野と霞ヶ関で撮影したのですが、これ、東京都下ではどういう意味合いのデザインになるのでしょうか？東京都下の市の気負いが出て、市のマークがもっと強調されているのでしょうか？知りたいなあ。ご存知の方はうさおまで写真をくださいね！

さて、上の蓋2葉は、先ほどの「桜と銀杏」の蓋たちと同族ですが、中央の水道局のマークが違います。特に「う～ん東京都」と比べると、回りの部分のデザインは同じですが、用途が異なるのか微妙中央が異なります。「マーク違い1」は、二つの融合体みたいなものです。最初の蓋と同じモチーフであることから、デザイナーは同じかもしれません。

さて次は、「桜と銀杏」の蓋のデザイン違い。後の二つは年代物のように思える。地紋が江戸時代のお奉行所のお白州の襖の模様によく似ているぞ。特に後のものは戦前のものかもしれない。擦り切れ方が半端じゃないぞ。東京都だよなあ？日立のマークにも似ているけど？

右のものは一般のものらしい。もしかしたら個人のもかもしれない。

鉄鋼の浮き出しの文字がある。さらに右の三つは小蓋の分野で、制水弁とか仕切り弁とかである。



水道局のものではないのかも？



この類は実は沢山のバリエーションがあるのだが、「地味！」、
 すごい地味なので、あんまり集める気がしない。ごめんね。味
 わいのあるものなんだけど、どっちかというとなんか市販されて
 いるものが多く、すぐ手に入るのだから市場価値が無いのだ。
 (って、こんな間で売買するやつなんかいるのか?)

さて、東京でも、上下水道だけではない蓋が存在します。

左のものは、消火栓ですが、横浜のは結構迫力がありました
 ね。その下は警察のマークが付いているが、何に使うか謎だね。
 それに続くのが、電力と情報化時代を代表する通信のものたち
 です。



消防庁の消火栓らし



これNTTね!



TEPCO: 東京電力



さて「警」のマークだ



旧電電公社のもの



日本テレコムだったか?

鶴岡は市というよりは、江戸、明治維新の街を彷彿とさ
 せます。各家庭にこの文様が色々使われていて、家具や蔓
 幕、小物にも鶴岡の紋が着いているような気がします。
 するってえと、こりゃあ、中々乙な感じじゃないですか?
 鶴に記念館。うん、いかにも小藩って感じ。

後はあまり凝ったものは発見できなかったよ。

桜か梅の紋に、鮫肌の地紋が続く。刀の拵えに似せたも
 のかもしれないが、地味だよこれは。



鶴に桜に紅葉と大宝館?



鶴岡のマンホール



どこでもデザインが変わら
 ない電電公社



地味な防火水槽



三島は繊維メーカーが揃っている處で有名ですが、もう一つの顔として繊維にだけに止まらない先端技術の粋を集めた繊維研究所があります。此處で有名なのは、なんと言っても白い繊維でしょう。何故か知りませんが、女性は白い水着が大好きだそうです。膨張色なんだけどね！特に白のハイレグ・ワンピースは夢だそうだが、此處で問題があります。

そう、白い水着は水に濡れると透けてしまうし、陽の当たり方でも透けてしまう。特に赤外線フィルターを用いて写真を撮ると、水着が着ていないのと同然に見えてしまうという現象が有名です。

男性には至福の時だが、自分が見知っている女性では些か目のやり場に困ってしまう。そこで開発されたのが、繊維の断面の中に星形の繊維が入っている、二重構造の繊維だ。この構造により、より白く、透けない水着が完成された。原理は簡単そうに見えるが、今までの糸の太さの中に、星型を組み込む技術は糸屋の技ではなく、ハイテクの超マクロの技術が必要だ。

この延長線でどれだけ細い繊維が出来るかをトライしたのが、エクセーナだ。よく、メガネ拭きに使われる高価な布だ。って、何かまた、論点が逸れちゃったけど、それがトマソン隊だからしょうがないね。三島ではあまり撮影できなかった。お客さんと一緒だったので、お客さんの目を盗みながらの撮影でしたね。



梅坪は愛知県の一都市です。私の住んでいる町と同じくらいの規模ですが、まだ手付かずの土地が多いです。

モチーフはどうか向日葵らしい。

(何で向日葵?)

実はあまり付近を歩けなかったので、良くは調べられませんでした。あまり種類がなさそうだった。

制水弁は餅網がモチーフなのか。

警察のマンホールは杉綾織だ。東京都の警察の文様は、目の回るような「くるくる」だったが、これは冬に合いそうなデザインだ。向日葵とは合わないけどね。

でも、梅坪の市のマークが無いなあ。ここまで見てくると日本の蓋は、シンボルマークと地紋に凝っているのが、よく判る。

これを支えているのは鋳物師の技になるものであろうが、それを当たり前のものとして色々なデザインを作り出している当局もすごいと思う。

日本の明治の文化は、英国、仏蘭西、独逸の都市文明に負うところが大きいであろう。って、前振りを振っておいて欧州の蓋に行くね。



梅坪の警察の蓋。しつこいようだが何に使っているんだ？



これがミラノの蓋？

最初がミラノの蓋。ミラノは初めての訪問だったので少し舞い上がってしまい、蓋に気が行きませんでした。昼飯にパスタでもと言う話になって、裏町を歩いていると、この蓋に気がつきました。

ミラノはデザインの街なのに蓋はあまり面白くありません。でもミラノの大聖堂の中の蓋は、ちょっと面白かった。って恐れ多いのに写真に撮っちゃった。

角型の蓋は日本のもそうだが、面白みに欠ける。そこへ行くとやはり蓋の王道は円形でしょうね。でも圧倒的に数が少ないんだな。西欧では。



え～期待はづれ！



ようやく円形の蓋が・・・

大聖堂の中にあつた蓋。少し罰当たりだったか？



楯をマンホールの蓋にでもしたんかな。ジャカルタではほとんどが、すのこ蓋ばかりで絵にならなかったね。

これなんかは、そういう意味では、ジャカルタ風だよ。踏んだときの感触が悪いんですよ、こういうやつは。ライ隊員はこれを踏むと、つんのめってますよ。指が入ってこけちゃうのね。

ミラノは雨ばかりで、路面はいつも濡れていました。あんまり寒いんで、お腹が急に渋りだして、急遽近くのお城に緊急避難してもらいました。お城見物はコースに入っていませんでしたが、皆様はご満足のご様子でしたが、私は死ぬ苦しみでした。

大恥をかいたミラノでしたが、本当は「地球温暖化」の国際会議に出席するのが目的でした。本当、お腹が痛くなるのならその会議場でなればどうにでもなるのに、移動中のバスの中でなるのね。ホテルまでの後 20 分が、持たなかったのです。冷汗がでました。

ここで気がついたこと。

向こうの公衆トイレは新幹線の中にある便器のように、ステンレス製であること。

有料であること。

緊急の時にはこのコインが、なかなか出せないさおでした。



すのこの蓋



これが多かったが、水道用ではなさそうだったな。字が読めないからな



セーヌ川か？

仏蘭西はセーヌ川のほとりには、多くのマンホールが揃っています。マンホールは力学的には円形の筒状のものが望ましいんでしょうね。

でも、ノートルダム寺院の近くはこの角型が多かったです。



歩道にある下水溝



シャンゼリゼにあった蓋。



何のためのバリ見学なんだか！

さて、ロンドンはというと倫敦塔近辺で見つけたものしか、撮ってこれませんでした。

旅行もこの頃になると会社に残してきた仕事が頭にこびり付き、持って行ったパソコンで今夜は徹夜でもしようかと思っていました。

その夜のテムズ河のナイトクルーズなんて、気もそぞろで砂を噛むような食事でした。

ああ、如何しようなんて思いながら、それでもディナーに来た女性の背中の開きに吃驚して、視線をちらつかせていました。さすが外人だなあ。あっ、スカートのスリットがあんなところまで。

気持ちと行動がちぐはぐなまま、この蓋を見てみますと、おお、流石に英国は陰謀の国、倫敦塔の近辺のものは、鉄仮面のような様相をしていました。なんだかなあ。

最近、ダイアナ妃の謀殺の話題がありますが、倫敦塔の中には、宗教上離婚の出来ない国王が、后を魔女だとして有罪にし断頭台に送ったという記録があります。この国王、8人の后と結婚しましたが、そのうち4人だかをこの手で謀殺しています。

確かパリでの話だったと思うけど、毎年学生が夏休みになるとこの下水道の中に入って、パーティをするんだそう。

案内に付いてくれたエレヌさんは、とってもエスプリの利いた案内で、結構、毒の効いたしゃべりでした。

下水道の中は、ちゃんと通りの名前が出ているので、迷わずに目的のところに行けるとのこと。

へーと感心をしていたら、それでも毎年2~3人くらい中で行き倒れている人がいるそうです。まっ、学生じゃないようですが。

人ごとじゃないですよ。うちの会社の人も、上野のルンペンさんを見て、明日はわが身かって咳いているのを聞いてしまいました。

地下道は湿気が多いのと、雨のときに流量が多くなったときに困りますよね。折角集めた所帯道具がみんな流されちゃいます。

(本気でその時のことを考えているうさお。暗いなあ、世の中はまだ！)

さて、上は角型なんだか円形なんだか意味不明の蓋。下はステッチでかがり縫いをしてある蓋。

あんまり可愛くないなあ。二つとも。



ロンドン塔に近いところにあった蓋
王室御用達か？



ロンドン塔の中のマンホール



倫敦塔の入り口です



おじさんの群れ

次の王妃に選ばれた女性は、はらはらものだったでしょうね。王妃になれるけれども、何時今度は自分が首を切られるか、火刑に処せられるか判らないのですから。

でっ、これが倫敦塔です。そして一緒に行った殆どJR関係のメンバー。5人1班で5班も行ったんだよ。こんな時代になんてパブリーなんだろう。って心の中では思いつつ、「いつもお世話になりますっ！」て、よいしょしながらね。

この中のメンバーの一人が同室だったんだけど、とんでもないやつでさ、風呂の水はあふれ返させるは、寝ながら酔っ払ってげろは吐くわで、その上議論を吹っかけてきて、あなたが今まで社会に何をしてきたのか？会社でやってきた事は大事なことじゃない。人を育てなきゃ何の意味もないなんて、のたまうんだよ。まず自分のことをしっかりしようって、言いたい言葉をぐっとかみ締め、「いつもお世話になりますっ！」

さて、倫敦塔の中は黄金で満ち溢れておりました。でも黄金の匙を齧っても、心は満たされませんでした。写真は禁止だったので黄金の写真はないよ。



倫敦塔の中のひとつ



倫敦塔の中のふたつ



倫敦塔の中のよっつ



倫敦塔の中のみっつ



確かに幾何学的なものは、欧米は長けているのかもしれない。繰り返しの美しさだ。



実は欧州の蓋は倍ぐらいの量の写真がありますが、まずは四角が多いこと、それと矢鱈、幾何学的な文様が多いこと。これはなんだかなあ。

歴史を探る感触も無く、癒しを感じる心楽しさも無い。厳しく言っちゃうとね。飽くまでも、ここに下水道ありますってだけのサインのように感じちゃう。

日本のものはそれだけじゃないように思えるぞ。東洋で

は如何なのかなあ。中国とか、韓国とかね。香港に行ったときには、まだ蓋の存在に気がついていなかったの、見過ごしてました。韓国はまだ行ったことが無いのでわかりません。

西洋より、東洋のほうが、こういったものの中に工芸を入れてくるので、良いぞって感じた。そこに業があるように思えますね。

インドネシアでは工芸的な蓋がなかったのは、オランダに支配されていたからかなあ。これが中国だったら、違ったかもしれない。または日本みたいに鎖国をしていたら、独自の蓋文化が出てきたかもしれない。紙幣や切手、テレカ、確かに日本のものは凝り過ぎだよ。だから鑑定団の活躍する余地があるのかもしれないね。

と言う訳で、また日本に帰ってみましょうね。

まず欧米に迎合した、周りのペーブメントに合わせた野毛にあった蓋。横浜っぽいのかもしいが、日本の民族性を感じません。では、神奈川の田舎、淵野辺の蓋を見て見ましょう。日本の情緒が色濃く出ています。やはり私達が求めていたのは、このようなさり気ない融和性だと思えましたね。でも、歩道を歩いている人は蓋はよく見えません。これらの蓋を撮ろうとすると、車に轆かれちゃいそうになります。



野毛にあった民芸的ではない蓋



淵野辺の工芸品



淵野辺の豊かさ